

道

michi

浄霊と幸福（令和6年実践計画書に戴いたみ教え）

本教浄霊は病気を治すのが目的のようになってきているが、本当からいうとそれだけではないので、もっと大きな意味があることを書いてみるが、一言にしていえば浄霊とは幸福を生む方法である。というのは単に病気といっても勿論浄化であり、その因は霊の曇りの解消作用であるのは、いまさらいうまでもないが、そればかりではなく、人間一切の苦悩のなくなる作用である。

したがって貧乏も争いも浄化の表れで、私のいう病貧争ことごとくがそれである。ところが一切の浄化作用のなかで最も重要なのが病気であって、これは生命に関するものであるからで、したがって病気さえ解決できれば、貧乏も争いも自然に解決されるのは当然である。勿論そうなることが幸福の根本であるから、不幸の原因はまったく霊の曇りであるのは、あまりにも明らかである。それを簡単にして確実な方法こそ、霊の曇りの解消法としての浄霊であるから、最初に述べたごとく浄霊は独り病気のみではないことである。それについて一層詳しく書いてみよう。

以前書いたことがあるが、人間の体は現界に呼吸しており、霊は霊界に生きている以上、霊界の状態がそのまま霊身に影響し、それが肉体に映るのであるから、人間の運命のその根本は霊界にあるのである。そうして霊界も現界と等しく、上中下多数の段階になっており、これを分ければ大別して三段階になっている。その内の一段が六十階、それが三分され二十段ずつになって、合計百八十一階級である。そうして一

は主神であるから、主神以外はいかなる神様でも、百八十の中のだれかの段階におられるのである。右は経をいったものであるが、今度は緯をいってみると、緯の広がりの一つ一つの段が、地獄から天国までそれぞれ異なっているから、仮に現在自分の霊とすると、下の六十段のそのまた下の二十段にいる場合は、最低地獄に相応するから、これ以上ないほどの苦悩に満ちた世界で、これが体に映って苦境のドン底にあるわけである。またその上の二十段に上ると幾分楽になり、そのまた上の二十段はもっとよくなるというように、それぞれの段階一段一段その苦楽の違うのは勿論である。それで右のとき下の六十段を突破すると、今度は中の段階になる。すなわち中有界、八衢であるから、現界に相応するので、そのまた中から上の六十段へ入ると、ここは天国であるから天人の地位となり、歓喜悦楽の境遇となるのである。

右のように、その人のいる段階そのまま通りが運命となるのだから、一段でも上に行くよう心がけるべきで、上になるほどますます苦しい忌まわしいことがなくなり、幸福は増すのである。つまり浄化すべき苦痛の必要がなくなるからである。だから人間は霊身が下段にある間は、どんなに智慧を振るい、骨を折っても駄目である。というのはこれが神の天則であって霊主体従の法則も厳として冒すことができないからである。故に幸福になるにはどうしても霊を浄めて軽くし、少しでも上位になるよう心がくべきで、それ以外に方法は絶対がないので、ここに浄霊の大いなる意義があるのである。

吉祥天は、福德を司る女神として信仰を集め、古来多数の彫像や画像が制作されてきた。この図は、左手に宝珠を捧げ、右手を与願印とする吉祥天を中尊として、両脇に梵天和帝釈天を配し、その上方に四天王を描く。図の上方には、散華供養する飛天と雲に乗った白象が配され、下方には、橋の架かった蓮池が見え、美しい紅白の蓮華が花開き、そのかたわらで一人の僧が香炉を持って供養している。この図様は、中国の阿地瞿多（あじくた）訳の『陀羅尼集』第十に説かれているものであるが、本図のような彩色画の遺例は少ない。白象の描かれている画面上部の絹は後補だが、全体の図様は、当初の姿を伝えている。

教王護国寺（東寺）伝来。



吉祥天曼荼羅図 鎌倉時代（13世紀）
重要文化財 MOA美術館所蔵

《目次》

み教え	2
令和6年信仰課題・実践の誓い	4
代表挨拶	5
感謝奉告 古賀 AT	11
感謝奉告 田川 MT	12
感謝奉告 三重 TM	13
三聖地の初日の出	14
御降誕祭(箱根)／御生誕祭(熱海)	16
立教祭(箱根)／新年祭(熱海)	17
シリーズ明主様(1)	18
全国信徒集会	20
感謝奉告 名古屋 YT	21
新連載『令和の平安郷建設』(1)	23
シリーズ《幸せの種まき》(7)	26

《令和6年 信仰課題》

浄霊の 奇蹟なくして今の世に

神さとするものあらじとぞ

【実践の誓い】

- 1 み教え集『明主様に倣いて』を拝読し、み心とお姿に倣います。
- 2 周囲に礼を尽くし、感謝と報恩に努めます。
- 3 浄霊を取り次ぎます。

西村 正資

新年、明けましておめでとうございます。

元旦には、天空の隅々まで一点の曇りもなく澄み渡り、清々しい霊気が漂う中、救世神殿において新年祭・立教記念祭をお迎えさせていただきました。

「一年の計は元旦にあり」 〃明主様がお進めになる健富和の整った世界の実現、そのご経綸に、「明主様と聖地に直結する会」の全信徒、そして関わるすべての祖霊様と共に、参加することをお許し下さい。「チーム直結」は、一丸となりお役に立たせていただきます。〃との祈りとお誓いを奉告させていただきました。

併せて、聖地に皆様から寄せられている「ご祈願」にも〃一日も早い皆様の平癒、また祈願の成就〃をお祈りさせていただきます。

穏やかな新年のご参拝が許され、感動しました。「神界霊界が随分光が強くなつたのでしょうか。その分、お浄めとしての浄化があまり厳しくなければ良いのですが」と、たまたま周囲に居た方々と話しておりました。

その数時間後「令和六年能登半島地震」という大きな災害が発生しました。家屋の倒壊や火災、津波等の情報

が、この原稿執筆中も、刻々とテレビで報道されています。想像以上の災害に、心を痛めております。犠牲になられた皆様のご冥福と、厳しい寒さの中、被災されている皆様に、一日も早く平穏な日々が戻りますよう、心からお祈りさせていただきました。

先ほど四国・阿南グループの若い信徒が中心になり、周囲の方々に「各自お祈りしましょう」と呼びかけ合っているという情報が入りました。嬉しいことです。その現場にいなければならない理由はありません。その時その瞬間の祈りがどんなに大切なことかと思えます。これまでの体験から、祈りは決して無力ではないと確信しています。自発的信仰に、大変心強く感銘いたしました。

私たちは本年も、明主様を見つめて真摯に歩ませてくださいたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

前頁に掲げました

『浄霊の 奇蹟なくして今の世に

神さとするものあらじとぞ思ふ』

(祈りの栞)

このお歌を、本年の「信仰課題」とさせていただきます。

なぜ今『浄霊』なのか。それは誰もが望む〃明るく、楽しく、心裕な理想世界〃を、明主様のお力をお借りし

て、実現しなければならぬからです。

例年「今年は良い年になるのか、どうだろうか」と、心のどこかで占うような、運命任せ、他人任せのような気持ちがありました。しかし、今年はそうでなく「良い年にする」という強い祈りと決意をもって「まず、自分が行動しなければ」と心を定めました。

昭和二〇年八月五日、群馬県前橋市に布教に出掛けていた小川栄太郎先生は、その夜一二〇機の米軍爆撃機B29の来襲に、多くの人々が防空壕に避難する中、一人屋根に登り上空に向けて手をかざしました。『空襲の時には、飛行機を浄霊せよ』と、その頃明主様が仰っていたので、その通りに実践したのです。前橋市の大半が被災し、三日間燃え続け、小川先生の居た家の周囲すべて焼失したのですが、その一軒が焼け残りしました。

その話を聞いていた私の叔母は、昭和三十一年九月一日に発生した富山県魚津市の大火（焼失家屋一五八三棟）で、自宅に約百mまで迫った火勢に向かつて「明主様お願いします！」と叫び、浄霊を始めたところ、急に風向きが変わり、焼失を免れ「浄霊のお蔭で助かった」と興奮気味に語っていたのを覚えています。その後叔母は、地方公務員のかたわら目覚めたように浄霊活動に励んでいました。

昭和二〇年八月六日広島に原爆が投下され、一瞬にして市は壊滅しました。それを知った私の上司夫人は、翌日には浄霊救済のため広島に向かいました。そして道端

で苦しむ多くの方々を浄霊しました。私が所属していた岡山教会には、その時に救われたという信徒が何人かいらっしやったことを覚えていますが、被曝が心配されましたが、その後夫人にも信徒にも原爆の後遺症は現れませんでした。

話しは少し変わりますが、以前、私は恋愛結婚された夫が、反社会組織の長であったという方に出会いました。周囲からは結婚を大反対され、ご苦労も大変であつたらうと想像します。しかし、夫人の徹底した明主様信仰のお蔭で、私がお会いした頃には、ご主人は組織を整理され、おひかりを首に掛けて、大きな身体を小さく丸め、穏やかな顔で自営業をされていました。

社会を変える壮大な望みも、ひとりひとりのささやかな信念と誠の行動から始まるのだと思ひ出しました。

明主様におかれましては地上天国創造のご経綸をはかれ、力を顕されていますが、この現実社会では、誰かが明主様のご意思とみ力をお受けし、表裏一体となり、創造の汗を流さなければならぬのだ、とみ教えいただいています。

しかし、その使命に仕えていく者は、明主様のお進めになるご経綸に抗う想像を絶する邪神の抵抗も覚悟しなければなりません。邪神の狙いは一つ「神の存在を隠す」ことにあります。そのため「明主様を無きものにする」と懸命なのではないでしょうか。邪神の力は九分九

厘まで、私たちの背後の神力は十全です。

世界の情勢を冷静に見つめますと、善悪が入り乱れ混とんとしています。とても重要な段階に入ったのだと感じるのです。私ども明主様の信徒にとりましては、活躍の時が到来したということではないでしょうか。

周囲の人々に、神様の存在を感じていただきましょう。諦めさえしなければ、正直者が必ず報われることを知っていたりすることです。そうすれば、人は神様に憧れ、その声に耳を傾け、姿勢を正すことになり、社会には少しずつ笑顔が増えていくことでしょう。

崇高な祈りと誇りをもち、生命を許された者として、神様を世界に顕す『浄霊』を、明主様と共に掲げさせていただきます。

『道』一二月号(67号)の感謝奉告に学ぶ

田川布教所のAJさんは、昨年秋に開催された「聖地宿泊奉仕研修会」に参加されました。出発前夜、三八度の高熱に苦しまれ、何度も目を覚まされたそうです。すると、何とご夫人がずっと浄霊を取り次いでいたのです。夫人も聖地参拝される予定でしたから、その準備もあり気づわしかつたことでしょうが、自らの取り組みを押しつけがましく伝えることもなく、黙々と取り次いでいらつしゃいます。素晴らしい夫婦愛です。

ここでもやはり「浄霊」ですね。同じ浄霊でもその願

いや想念によって、許される力の強弱が生まれるように思います。夫人の浄霊は「何としても夫婦で聖地奉仕に参加したい」という思いと、ご主人の「ありがとう」という感謝の思いが強く反映し合い、奇蹟を呼び込む浄霊力を許されたのではないのでしょうか。

聖地出発直前に、心を整えられ、素晴らしいお浄めをいただかれました。そのお蔭か、聖地では、明主様の気配を感じ、今日まで信仰や聖地を護り繋いでくれた先達に想いを寄せて感謝され、ご自分には不平不満を言う回数より感謝する回数を増やそうと素直に決意されてお帰りになっています。

私は、過去さまざま機会にご浄霊をお取り次ぎさせていただきますましたが、愛情深いそして霊線の一番太いご夫婦の浄霊が一番と感じたことが度々ありました。ですから、ご浄化者に出会った時、まず確認したのは、家庭内での浄霊の状況でした。ご守護を許されるための要の一つだと思えます。

土佐みろく教会のHMさんは、世界救世教からいただいたみ教え冊子『明主様に倣いて』について、感謝の奉告をされました。

ワクワクし、すぐ拝読されたそう。「心が温かくなり、自然と涙が出てきました」と奉告され「どうして」と振り返られたそうです。その時に思い出されたのが、以前勉強会で教わった「お文字から光をいただける」という

ことで「明主様が浄霊をして下さったのだ」と強く思えたそうです。

八三歳だそうですが、「これから何をさせていただくか」とよく考えられるようです。素晴らしい人生の構えですね。神様をよく知る人は、やはり「尽くされること」より、「尽くさせていただくこと」ですよね。Hさんは、多くの信徒の相談に乗ったり、遠方の浄化者に遠隔浄霊を取り次がれ、明主様のみ教えに倣おうと努めていらっしやいます。

素晴らしい人生を、今も謳歌されているのではないのでしょうか。Hさんに、私も倣わせていただきます。

名古屋栄グループのYMさんです。

昨年七月より、MOA美術館のレストランでパティシエとして活躍をされています。

元々、その道に進みたくて学校で学び、他で修業を重ねてきたようですが、両親が「明主様と聖地に直結する会」にご縁をいただいた直後、不思議なつながりで美術館のレストランでパティシエを求めていることを知り、ご縁をいただき、就業することになりました。

このレストランは、著名なパティシエ鎧塚俊彦氏の監修で運営されていて、タイミングが合わないかぎり、ここでの就労は難しかったと思います。聞くところによれば、Yさんは、鎧塚氏からその意欲と技量を認められ、様々な技を教えられると共に、既にレストランのデザー

ト部門を任せられているとのこと。

『運』というのは、人との出会いであり、時であり、不思議なものです。美術館では「東方之光の方もいづのめの方も聖地直結の会の方も、心一つになって働いている」と奉告され、「明主様のもとに一つになっていく型」を意識し、「この型が多くの来館者にも拡大して欲しい」と、のびのび明るく活躍されています。

嬉しいですね。皆さまもどうぞ美術館にお越しの折は、レストランにもお立ち寄り下さいませ。

徳島グループのTMさんです。

グループでは、定期的に浄霊集会を開催され、この機関誌にも度々ご守護の奉告を寄稿されています。お世話の皆さまが、よく連携を取り合い、協力されている信仰の姿には、感心しております。そのような中でも、Tさんは謙虚に出会う方の姿や言葉から学ぼうと努力されている様子が伺えます。

昨年五月には、夫君が白内障の手術をされ、夫婦の浄霊をしつかり取り次ぐことに努めました。秋には自分が階段から落ち、夫に「お願いします」と、浄霊を求めました。浄霊は、互いが真正面に向き合い取り次ぎます。自分に近い存在、特に夫婦では礼節に欠ける傾向があるように思います。しかしこの度のTさんは、取り次ぐ時もいただく時も、互いに礼節を心がけ向き合われたように感じます。ですから、互いが「うれしい」という愛情

の交流が夫婦の霊線を太く輝かせ、お蔭も許されたのではないでしようか。家庭の中心の霊界が整い明るさが増すことで、不思議なことに二〇数年断絶状態であった親戚との交流が復活し、今年も再会の約束をされているそうです。『霊界のあり様が現実界にも現れる』との、み教え通りのご守護です。

一月には、聖地宿泊奉仕研修に参加後、「みたまや」様をお迎えされました。

家庭内での夫婦の関りは、家や家族の運命にも大きく影響することを学ばせていただきました。

東大阪グループのNMさんです。

過去二度機関誌に、友人NT様の「感謝箱」の取り組みについて、感動されたことを奉告されましたが、今回もその子息の感謝箱の献金をお預かりした際の感動を奉告されました。

先回は、そのほとんどが一円玉でしたが、この度は百円玉が主でした。友人NT様がそれをお届けになられた時「手数をかける」旨の話しをされたので、NMさんは「金種や額に分け隔てはなく、お捧げになる心意気こそが大切」と伝え、清らかな信仰心に感動されたことを伝えていらっしやいます。また、ご子息がその感謝箱の取り組みの最中、聖地参拝をされ、「おひかり」のお浄めもされました。きつと確かな何かを感じ取られたのでしよう。ぜひそのことも伺いしたいものです。

嬉しいですね。そのような純粋な信仰が、次第に深く大きく成長していることに感動します。次の世代に魂の清らかさが引き継がれていることに、明主様も大変お喜び下さっていると思います。

東大阪グループのOAさんです。

この度、日本作曲家協会カラオケ選手会シニア部門で、日本一に選ばれました。本当におめでとうございます。

古希を迎えてなお向上心を持ち、チャレンジするお姿は、私たちに大きな希望と励ましを与えて下さいます。

明主様も歌がお好きで、よくご家族で歌っていらっしやうたと聞いています。歌唱は想像以上に心を感化します。

明主様が提唱された芸術の重要な役割なのでしょう。周囲に安らぎを与えるのも、明主様のご用の一つと信じて、これからも大いにチャレンジなさって下さい。

また、姪っ子さんが出産時に亡くなり、遺された赤ちゃん(MR君)が脳死状態で入院中とのことで、聖地にご祈願の申し込みをいただきました。大変厳しい状態です。

命が生まれ存在するのは、そこに深い私たちの認知を超えた「神様のご意図」があるということです。立派な名前もいただかれました。命は大切です。生き続けることももちろん重要ですが、最も大切なのは、その子の命の使命が果たされることではないかと思えます。誰も代ることができない厳しい役割を、小さな身体で一生懸命背負うR君の頑張りを称え、その人生の使命の成就を祈

りたいと思えます。私も、引き続き聖地にて祈願を続けさせていただきます。

年頭の今号にも、素晴らしい感謝奉告が掲載されています。その背後に、明主様から、私たちに向けられた大愛と新たな年への重要なメッセージが存在しているものと信じ、今後も謙虚に学ばせていただき、誠をもってお応えさせていただきたいと思えます。

二月四日は『立春祭』が執り行われます。すべてを主宰される主神の神威がいや増し、今年における森羅万象の活動が勢いづく起点のみ祭りとなります。

二月一〇日は『教祖祭』が執り行われます。昭和三〇年二月一〇日、明主様は、救世主として現界における神業を終えられ、いよいよ本格的な地上天国建設のため、神界の深奥にお立ちになりました。

この日を、明主様のご昇天祭という意味合いを強くしてまいりましたが、今一度丁寧に整理させていただくことが大切ではないかと思えます。

明主様が地上を離れられ、名実ともに「救世主として降臨された」神事と、私は受け止めさせていただいてます。

そして、地上における天国建設の経綸の要として世界救世教を機関とされ、信徒をお使いになります。

そのことは、『天国の雛型』としての重要な使命を

「信徒」に付与されることとなり、神幽現一体の神業体制が本格的に整ったという意義ある日が、昭和三〇年二月一〇日であると受け止めています。

私は、自らが救われたご恩と共に、榮^はえあるご神業への参加を拝命したことに感謝申し上げ、ご参拝させていただきます。

年頭にあたり、皆さまの誠と祈り、そして活動に、大きな導きとご加護を賜りますよう、心からお祈り申し上げます。

まだまだ寒さが続きます。どうぞご自愛下さいませ。



瑞雲郷梅園の紅白梅

感謝奉告

祈りは国境を越えて

古賀集会所 A T

令和五年五月号感謝奉告の要約

昨年正月二日、例年訪ねてくるSさん(従弟)が来ない。暮れの三〇日、この付近で倒れていた老人が病院へ運ばれたと知り、急いでその病院を訪ねる。ポケットに入っていた健康保険証から、Sさんと判明。頭を強打し、意識はない。主治医から、飲酒により肝臓悪化、脳挫傷、外傷、くも膜下出血、左急性硬膜下血腫、右急性硬膜外血腫、右側頭骨線状骨折、認知症状、手術が必要と告げられる。この時、Aさんは独り暮らしのSさんの面倒は、私が見ると決心。連絡がとれたNさん(Sさんの実娘、ブラジル在住)に、世界救世教に入信し祈ることを伝えたところ、昨年サンパウロ教会にて入信。聖司さんに、ブラジルから祈りと遠隔浄霊に取り組む。

昨年六月二二日、Nちゃんがブラジルからやって来ました。彼氏のA君も来てくれました。ブラジルは本当に遠いです。四五、六時間もかかります。六ヶ月の間、病んだ父親にも会えず、どんなに苦しかっただろうと思うと、顔を見た途

端に涙が溢れました。すぐに病院に行きました。いろんな思いが先走っていて、必死で話しかけます。問いかけます。ですが、Sさんは、誰が話しかけているのか分からない感じで、キョトンとしています。自分の娘であることすら分かっていません。わずか一五分の面会でしたが、劇的な出会いでした。とても困難と思われた二人の出会いが実現できたのは、大神様、明主様のお働きであったと心から感謝です。

通訳する人がいないので心配でしたが、ラインを通じて話ぐできました。私の思いを携帯に話しますと、すぐポルトガル語に変換してくれます。Nちゃんもポルトガル語で携帯に話しますと、すぐ日本語になります。お蔭でお互いの気持ちを分かり合うことができ、素晴らしい時間を持つことができました。A君もしっかり見守ってくれていて、力になりました。八日間、がんばって病院に通い、すっかりお世話ができました。後ろ髪が引かれる思いで、ブラジルに帰っていきました。Nちゃんが精一杯お世話したお蔭で、七月、八月は寝たままの状態でしたが、Sさんの顔色が良くなり、食欲が出てきました。

Nちゃんはお寺におまいりに行き、仏様をどうするか和尚様と話し合いました。ブラジルでは、遺骨は海に散骨するそうです。「納骨堂はそのままにして、五〇年分の費用を納入し、永代供養したらどうか」と提案してくださいました。九月初めに、私に思いもかけないお金が入りました。Sさんの家の先祖供養に使おうと思いました。すぐにお寺で供養の手続きをさせてもらいました。

寝たままのSさんが九月になって、急に容態が上向き始めました。食事もトロトロ食から、普通食になり、一人で食べることができるようになりました。車椅子で動き始めました。一〇月には、トイレが上手にできず、失敗ばかりで洗濯物が増えました。でも、どんなに気持ちよからうと思いい、洗濯に励みました。一月には、洗濯ものは減り、ひと安心です。

車椅子での生活時間が多くなり、座布団も要るようになりました。おやつも小袋に入った菓子がいただけるようになりました。先生もあまりの急回復にびっくりされています。看護師長さんも私に抱きついて喜んでくれました。すぐNちゃんに知らせました。すぐにメッセージを送るようお願いしました。Nちゃんはビデオを送ってくれました。それをSさんに見せると、ニコニコして見て、時々ポルトガル語で応えています。そこですぐブラジルにラインビデオを送りました。親子で会話ができました。楽しそうに話す姿に涙がでます。

その後、「パパは、私が日本に来た時のことは覚えていなかったよ。でも、今回話ができとても嬉しかった」とラインが来ました。Sさんがここまでになれたのは、大神様、明主様のお働きと、先祖様が働いてくださったのだと、感謝で一杯です。身体が回復に向かっている、認知の方も良くなるのではないかと希望が持てるようになりました。聖地でのお祈り、古賀集会所の方々の遠隔浄霊、お祈り、ブラジルからの二人のお祈りに守られて一年になります。お蔭で幸せな人生を与えていただきました。心から感謝申し上げます。

感謝奉告

私の“みあと”のびて

田川布教所 MT

昨年の一〇月一日に所長と一緒に、聖地参拝させていただきました。その時の奉告をさせていただきます。

実は、今月は、私の父が亡くなりましたから一七回忌に当たる月で、参拝のお話は祖霊大祭の数カ月前にもお誘いを受けたのですが、その時は、仕事の都合やもろもろの理由で、決心が付きませんでした。ですが、その時に「一〇月頃なら」とすでに一〇月に参拝に行くことを決めていました。その時点では、父の命日月であることも頭にはなかったのですが、なぜか早々と決まりました。

九月に入り、布教所に参拝した時、慰霊祭の申し込みの話がありました。一〇月は、父の命日月だと気付いたのはその時です。

今回は、所長と二人で参拝させていただくことになり、前日の九月三〇日から、出発しました。お蔭で、明主様のご生誕地や明主様が産湯を使われた井戸も見せていただきました。浅草寺への参詣や、明主様や岡田家の菩提寺である観音寺にお墓参りまでさせていただくことができました。

参拝当日も、秋季大祭と祖霊月次祭、年祭・慰霊祭に参拝させていただくことができました。当日は、海外の参拝者も

多く、たくさんの方から、総勢三百人ほど来られているとの館内放送が流れており、今まで経験したことのない雰囲気にも包まれての参拝でした。きっと父も一緒に喜んでくれていたと感じました。

今回の聖地参拝を振り返ると、私自身は何の考えもなく、ただ聖地へと向かったのですが、立ち寄らせていただいた場所や、その時の参拝など、すべて、明様に導かれていたような気がします。

この度の聖地参拝に深く感謝し、ご奉告させていただきま

感謝奉告

“明主様！”と念じ、奇蹟が

三重グループ TM

今年の一月二日で明主様とのご縁をいただいて六〇年になります。信仰の還暦を迎えました。

母が家庭不和で悩んでいるときに、知人が愛の手を差し伸べて下さり、私は家族に内緒で入信しました。続いて姉が入信したものの4ヶ月後に嫁いだため、中学3年生の私は、信仰の中身も分からないまま、「おひかり」を首にかけているだけの状態でした。

それから六〇年間、何のお役に立つこともできず申訳なく

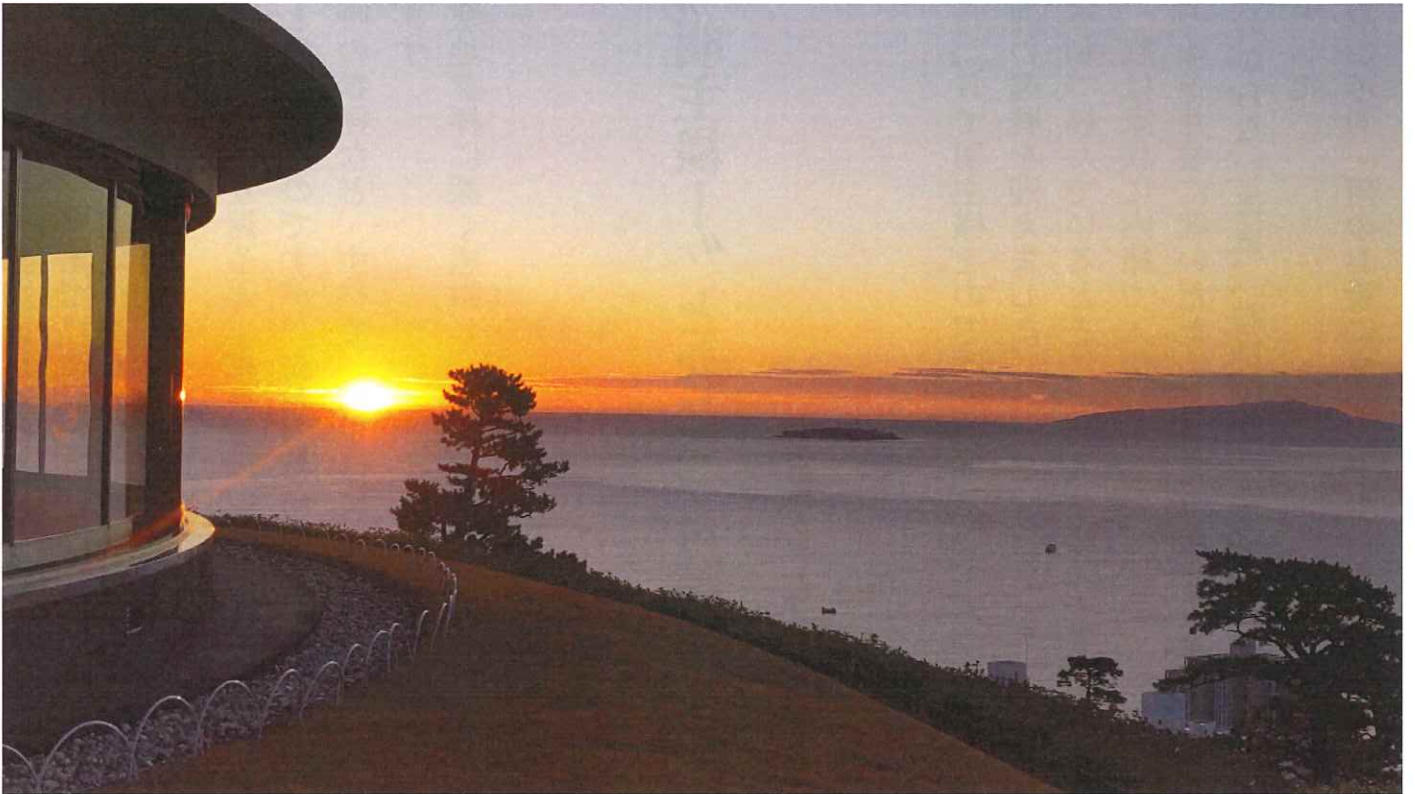
思っています。ご守護は、数え上げればきりがなくらいいただけてきました。

先月の御生誕祭に参拝させていただいた帰りのことです。名古屋駅で新幹線を降りて、階段の手すりにつかまって降りていたつもりが、何故か手を放し、傍にいる夫に掴まろうとした瞬間に記憶がなくなりました。数秒後に、頭がぼんやりしたまま、自分が階段から滑り落ちていることにかすかに気付いたようです。周りは見えないうえ、ただ手を延ばしている手の先と、階段が4〜5段位が見えていて、下に落ちそうになった時、“明主様！”と心の中で叫んでいました。その時、右手の方から男性に「大丈夫ですか？」と、声を掛けられ、背後から抱き上げられ、危ういところを助けていただきました。その人の声と顔ははつきりと覚えておりましたが、他のことはほとんど覚えていなかったようです。助けて下さった人にお礼を言うと、直ぐにどこかへ行ってしまわれました。“もしかしたら明主様のお使いの人だったのかも？”と、思わずにはいられません。もしその人の助けがなかったら、階段の下まで落ちて大変なことになっていたにちがいないと思います。

帰宅して早速、明主様にわずかですがお玉串を添えてご守護と感謝のお礼参拝をさせていただきました。信仰の還暦を無事迎えられたこと、このような大きなご守護をいただき感謝の気持ちで一杯です。

明主様、本当にありがとうございました。

雲郷・京都平安郷の初日の出



熱海瑞雲郷から初日の出を迎える。穏やかな海上に初島、伊豆大島が佇む

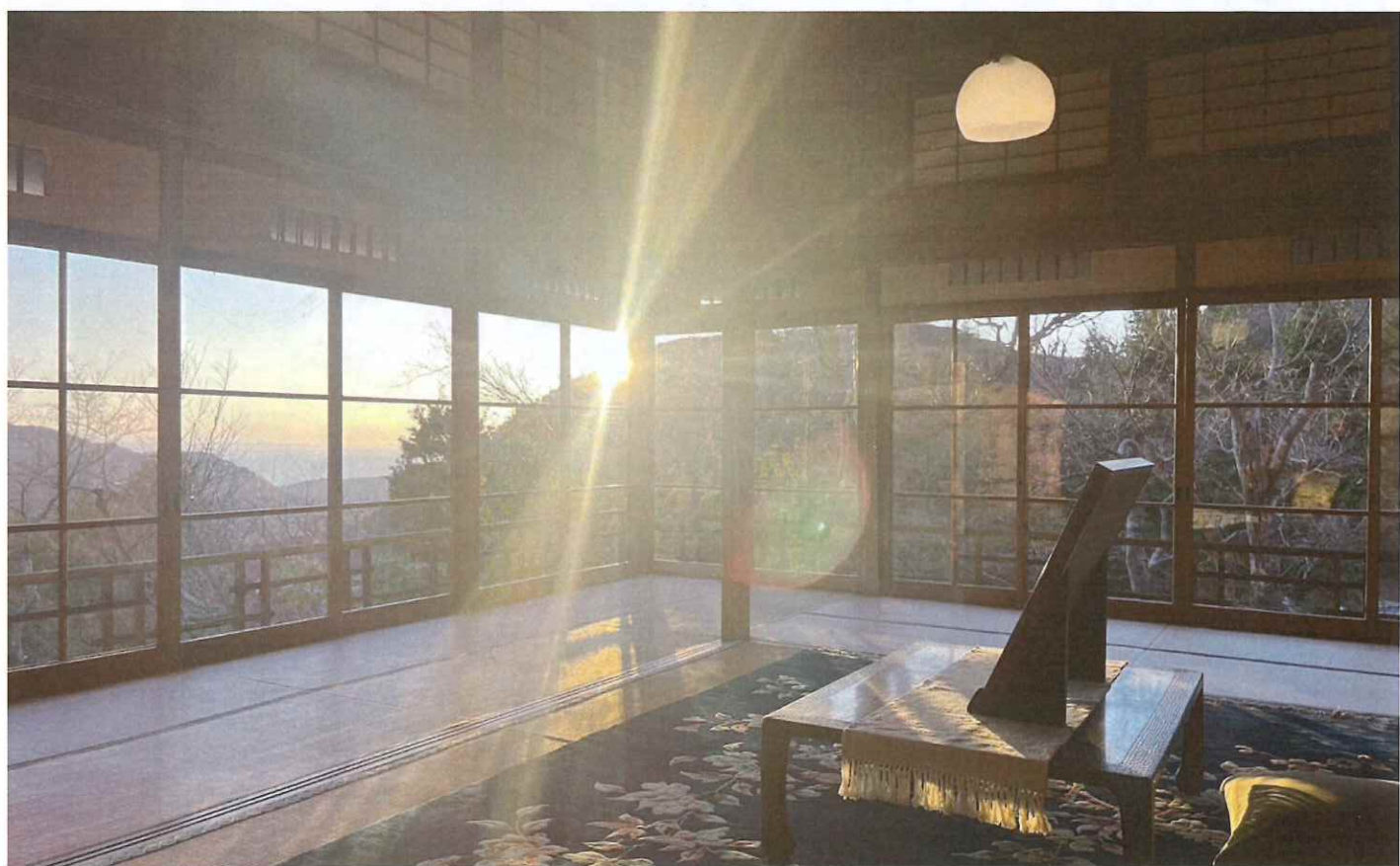


京都平安郷では、厚い雲を裂いて現われた初日の出を拝した

令和6年箱根神仙郷・熱海瑞



初日の出の厳肅な光景に包まれる箱根神仙郷



神山荘に降り注ぐ初旭光



御降誕祭（箱根）

神仙郷完成70周年節目の年に、新たに神仙郷の五つの建造物が国の登録有形文化財として答申された。明主様のご経綸がひとつ、またひとつと進められている証とその解説に参拝者の喜びと祝賀の空気が、一層高まった。



御生誕祭（熱海）

コロナ禍を乗り越え感染症対策が緩和される中、参集した数多くの参拝者が明主様の御生誕を寿いだ。また令和5年に賜ったご守護に対する感謝の御礼奉告とともに、令和6年の新たな教団方針が捧げられた。

立教祭(箱根)



東方之光は立教祭にて、「紫微宮」の完成を控え、また、仮光明会館の新装に着手することを奉告。更なる御神業発展を目指して、信徒一丸となって邁進することを期す一年の出発となった。



新年祭(熱海)

2024年の今年、メシヤ降誕仮祝典、そして水晶殿完成から70年に当たる。また、平安郷に大弥勒御尊像がご奉斎されて30年、節目の年。いつのめ教団は、「明主様に倣いて」の拝読、浄霊の利他の実践に努める決意を捧げる新年祭となった。

「旭ダイヤモンド」の発明

短時日のうちに頭角をあらわした岡田商店の地位を不動にしたものは「旭ダイヤ」の発明である。これは教祖自身の発案、研究になる、全く新しい方法によって作られた装身具である。

大正二、三年（一九一三、四年）ごろの、ある夏の日の午後、神奈川県金沢の別荘で、昼寝をしていた教祖は、軒先に吊るしてある風鈴の、涼しい音色に目を覚ました。音のする方を見ると、少し西の空に傾きかけた太陽から、赤みがかつた光芒が斜めに差し込んで、かすかにゆれる風鈴にあたり、虹のような七色の光に輝いている。

教祖は、しばらくその美しさに見入っているうちに、ふと気がついた。

「婦人の髪飾りや洋装の胸元に、この輝きを利用出来たら、どんなにすばらしいことだろうか。」

このアイデアに思いをこらした教祖は、さらに一段と想を練り、工夫に工夫を重ね、ついに鏡を利用することに思いいたった。これは、ごく薄い鏡を紙か絹布に貼って細かく割り、それを紙や絹布ごと金属やセルロイドの台に貼り付ける方法であった。この方法によってできあがったものは、本物のダイヤモンドのように目にまばゆく輝き、しかも、さまざまな

色彩に変化する。そのうえ、櫛、簪、ブローチなどに広く活用することができるものである。

教祖は間もなく、これを商品として売り出すとともに、さつそく「ワリダイヤ」の名称で特許を申請した。大正四年（一九一五年）五月のことである。翌五年八月、星と月を組み合わせたデザインの商標登録をしたが、その時から「旭ダイヤモンド」、略して「旭ダイヤ」と呼ぶことになった。

「旭ダイヤ」の斬新な美しさは、当時の女性の心のみごとにとらえた。鏡であるから、光を受ければまばゆく輝き、まわりの色により無数の彩りに変化する。しかもこの「旭ダイヤ」のうち、安い方の品はといえば、卸値で一ダース（一二個）が一円三〇銭くらいからという格安の売値である。これなら、誰でも容易に買うことができる価格であったから、製品のす

ばらしさと相まって全国から引き合い（売買の取り引き）が殺到し、作っても作っても追いつかないほどであった。

岡田商店の番頭・木村金三の子息、二代目の木村金三は、子供のころ、家族と芝居を見に行つたおりの「旭ダイヤ」の印象的な思い出をつぎのように述べている。それは幕間（芝居が一段落して幕が下りている休憩時間）に弁当を食



旭ダイヤ

べている時のことであつた。父親が、「ちよつと立つて劇場の中を見てごらん。」と言う。木村少年は言われたように立ち上がつて、薄明るい照明に照らし出された客席を見回した。するとほの暗い劇場のあちらでも、こちらでも、女性の見物客の頭がキラキラ、キラキラと光るのである。木村が謎めいたその美しさに思わず見とれていると、父親は、「あれはみな、岡田商店の旭ダイヤなんだよ。」と誇らしげに教えたのであつた。

岡田商店は、この「旭ダイヤ」の装身具だけで、当時の金で一〇万円という大きな利益をあげた。また、この製品の取引先は、東京の三越、白木屋、松屋、白牡丹、三枝、関口、大阪では大丸、芝翫香、井筒屋など、東西の百貨店、有名老舗を網羅するものであつた。このようにして、大正五年（一九一六年）、教祖三三歳の時、岡田商店は業界の一流店となり、その地位は不動のものとなつたのである。

「旭ダイヤ」を發明して数ヶ月たつた大正四年（一九一五年）の七月、教祖は続いて「ブライト櫛」という製品を考案した。これは、金属かセルロイドの面に凹凸をつけ、そのくぼみに彩色ガラスや無色のガラス、または、ガラスとエナメルを装填し、裏に金属を貼り付けたものである。

この「ブライト櫛」と「旭ダイヤ」とに共通していることは、伝統工芸である螺鈿につながりがあることである。螺鈿とは、夜光貝、鮑貝、蝶貝のような真珠光を放つ貝殻を磨いて平らにし、文様の形に切つて貼り付けたたり、細かく割つて蒔いたりする技法、つまり嵌装である。すなわち、「旭ダイ

ヤ」、「ブライト櫛」はともに、それまで、金属やセルロイドの板に光沢のある貝殻の片を装填したやり方を、新しくガラスや鏡に試みたものである。教祖のこの着想は、人々の意表をつき、しかもその効果はすばらしいものがあつた。美しいものを身に付けたいという願ひは、人間共通のものである。とくに、女性にこの思いが強いことは否めない。人々のこの願ひに応え、模造品ではあつたにしても、本物に近い形で、しかもできるだけ安い価格で提供し、庶民に喜んでもらえるものを作り出そうと工夫を重ね、努力を続け、そうしてできあがつたものが、前記の「旭ダイヤ」をはじめとする一連の作品である。

大正四年（一九一五年）、實用新案特許の書類には、「外觀優美ナルノミナラズ、彼ノ蒔絵等ニ比シ、頗ル廉価ニ供給シ得ラレ、且持久力ニ富ミ、真ニ實用ニ適スル考案ナリ」の一文が見えるが、教祖の真意がうかがわれる文章である。国内市場に対して、このように活気に満ちた働きかけをしたばかりか、海外市場に対しても、教祖は世界的な構想をもつて、次々と手を打つたのである。

まず、世界のおもな国々から、「旭ダイヤ」の特許を取得したことがあげられる。そのころ、特許制度が確立していた国は、日本のほかに、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、オーストラリア、カナダ、インド、ブラジルの合計一〇か国であつた。教祖は、この一〇か国全部の特許を取得したのである。

聖地直結の会 全国信徒集会

浄霊業に邁進する一年に

一二月二三日、御生誕祭後、聖地直結の会全国信徒集会を開催。集会を通して、令和六年は、いまだく浄霊から取り次ぐ浄霊業に邁進するという当会の基本方針が示された。また、昨年一〇月二八日、帰幽された則武相談役を偲ぶ会も併せて行われた。この日会場に展示された明主様の御書は則武家から寄贈されたものである。



令和6年の信仰課題と実践の誓いが発表された



故則武相談役を偲ぶ



寄贈された御書紹介



参加者紹介

全て明主様のメッセージ

名古屋栄グループ Y T

昨年の御生誕祭、そして、今年の新年祭に参拝できたことを、とても嬉しく思っています。

今回、私が聖地で感じたことを感謝奉告とさせていただきます。

私は、御生誕祭の日、とても体調がよかったです。朝から気持ちよく目覚めることができ、車酔いをすることもありませんでした。そして、聖地に着いたとたん、素晴らしい熱海の景色を見ることができました。水晶殿では、さらに素晴らしい景色を眺めることができました。これだけで、私の心は幸せに包まれました。つまり私は、心身ともに万全の状態です。

しかし、私のこの状態は祭典の最中に一変しました。それはちょうど、天津祝詞奏上の時です。私の頭、ちょうど額の中央の奥辺りが痛み始めたのです。それまで体調は良かったのに……。私は、突然の痛みに少し驚きました。しかし、それに対して、「最悪だ」「どうしてこんな時に」といった、ネガティブなものを感じることはありませんでした。なぜなら、この頭の痛みは「明主様の光が私に届いて、浄化として痛んでいるのだ」と、認め受け入れることができたのです。

そうすると、痛みは自然と治まりました。この出来事は、私に父から教わった、「すべての物事は明主様からのお気付け」と思い、認め受け入れる」ということを、身をもって体得させられたのだと感じました。そして、この想念の大切さを改めて感じることができました。このようなことを、御生誕祭で体験できたことにとっても感謝しています。その後、浄霊を受けた際には、先ほどの痛みとは打って変わって、温かく心地良いものを感じました。私は、浄霊の素晴らしさ、そして明主様の素晴らしさを改めて感じるようになりました。

今年の新年祭では、御生誕祭の時とは全く違い、体調はよくなかったです。朝から喉が枯れ、車酔いもしました。そんな万全ではない状態で新年祭に参拝することになりました。その後も終始体調が良くなり、御生誕祭の時のように、祭典の最中に一変することはありませんでした。

しかし、こんな私の状態を忘れさせるほどの出来事が起こったのです。それは、祖霊月次祭、年祭、慰霊祭で、神様へ天津祝詞を奏上している時のことでした。御神殿の側にある、ろうそくの灯が揺れたと思った瞬間、御神殿に差し込んでいた光をより強く感じたのです。私は自然と「懐かしい」と思ったのです。しかし、私はその時、その意味が分かりませんでした。実は、御生誕祭で額の中央の奥辺りが痛んだ時にも同じように、自然と「帰ってきた」と思ったのです。これについても私は、答えを得られませんでした。

そんな中、私は帰りの車中で、父にこのことを話しました。すると父は、自身が新年祭で感じたことを私に話してくれま

した。それは、「霊界と現界の隔てがなくなったような新しい感じがした」と話してくれました。そして、「皆、無意識のうちに、祖霊様の存在と明主様を離れた存在として分けてしまっているように思う」と私に教えてくれました。その時、私は気付いたのです。私自身もそのように分けていたと。そして、私の思った「懐かしい」「帰ってきた」というのは、私が無意識のうちに遠くへ追いやってしまっていた祖霊様が、明主様のもとに帰って来られたということの合図なのだと、私は、二度の聖地参拝を通して感じさせられ学ばせていただきました。

私は、御生誕祭と新年祭で、このような素晴らしい体験をさせていただきました。〃すべての物事は明主様からのお氣付けと思い、認め受け入れる〃ことの重要性、そして、このように思うことで新しく見えてくる世界があるのだということを実感させていただきました。また、浄霊の素晴らしさについて身をもつて感じさせていただきました。

これから生きていく中で、たくさんポジティブなこと、ネガティブなことが起こると思います。その時、その起きたことを、先ずはじめに明主様が起こされているのだと思い、認め受け入れていきたいと思います。それが「神はある」の第一歩なのだと思います。そして、浄霊を通して、たくさんの人を救うご用に携わり、そして、自分自身を高めていきたいと思えます。ありがとうございます。

2月4日 立春祭のご案内

長き世を かくろいませし常立の

神出でまさむ春立つ今日の日

すべてを主宰される主神の神威がいや増し、今年における森羅万象の活動が勢いづく起点となるみ祭りです。皆様におかれましては、是非ご参拝くださいますよう、ご案内を申し上げます。

訂正とお詫び

「道」67号に掲載した感謝奉告・東大阪グループNM様の文に、誤りがありました。ここにお詫びして、訂正させていただきます。

21頁6行目(誤) 希望なの額額でなく心意気

(正) 希望なのです。「金種でなく心意気

今後は、細心の注意を払い編集してまいります。

編集子

「令和五六七の年」

高頭 和生



明主様は、広沢池畔(椿茶屋辺り)に立たれ、右方向の平安郷の地を眺望された

新年あけましておめでとうございませう。今月より新たに「令和の平安郷建設」を連載させていただきます。

昭和二六年五月、明主様は初めて中部・関西のご巡教をされた二日目のこと、清涼寺釈迦堂から法然院へ向けてお車を走らせている途中、広沢の池に差しかけた時、車を止めさせ、「いずれ京都にも地上天国をつくらねばならないが、このあたりがいいな」と仰いました。そして翌年二七年の秋に約一万八千坪の土地を入手され「平安郷」と命名されました。

明主様が入手された当時は、敷地の多くが田んぼで池畔には葦やスキが生い茂っていたそうです。昭和四〇年、田んぼは埋め立てられ広場となりましたが、その直後、このあたり一帯は古都歴史的風土特別保存地区に指定され、細かい規制が設けられて造苑はやむなく凍結となりました。時を経て年号は平成となり、「平」安郷が「成」るに通ずるからと、改めて京都市へ申請した法令に準じた造園計画が許可となりました。そうして平成四年八月一日に、みろく塔が春秋庵横に奉安されると、みろく塔の奉安が建設の霊的な建設開始の働きを担ったかのように、その直後から庭苑のライフラインの整備が進み、平安郷奉仕研修の受け入れ体制が徐々に整っていきました。京都市が平安京遷都千二百年を迎えた平成六年六月六日には、春秋庵に大弥勒御尊像が御奉斎され、一気に建設が進みました。さらに平成一〇年、二代教主様は、「明主様の火の経綸、二代様の水の経綸、そしてそれが回転していく三代の結びの経綸、土の神業がいよいよ始まります」と、平安郷建設に大きく旗を振られ、明主様の願われた平安



春秋庵に御奉齋されている大彌勒御尊像

郷建設を継承すべく使命を宣言なされました。平安郷建設は、第一期は庭苑一帯、第二期は春秋庵周り、第三期は岡田茂吉記念館と、順調に建設は進んでまいりました。ところが平成二九年ごろから、教団内には大きな問題が表面化し奉仕の受

け入れが滞りました。そして昨年までコロナ感染症感染拡大の影響を受けたこともあり、しばらく建設は中断を余儀なくされました。また、平成二二年には春秋庵の第二期改修工事に伴い、大彌勒御尊像は御巻上げとなり、翌年にはみろく塔が茶室の待合の裏手に安置されてしまいました。

そして年号は令和になりました。平成最後の年となった平成三一年二月（五月より令和元年となる）、大彌勒様に春秋庵の御神床へお戻りいただき、令和三年一月、みろく塔を元の場所へ奉安させていただきました。さらに令和五年の一月から大彌勒御尊像月次祭が聖地平安郷の月次祭として執り行われ、春と秋には大祭が執り行われるようになりました。そして今年、令和六年六月六日は、大彌勒御尊像御奉齋三〇周年の御祭りを迎えさせていただきます。

明主様は、「宇宙一切は三の数字が基本となっております、これが宇宙の鉄則であって、夜昼といえども三年、三〇年、三百年、三千年というようになっていく」と仰せられ、三の数の働きをみ教えくださっています。そして、「今後の地所（平安郷）というのは、ちょうど、釈迦堂と法然院の間ぐらになっていきます。そうすると釈迦、阿弥陀、その真ん中の私の方は観音ですから、それで三位一体の型になったわけですね。」と彌勒三会を説かれ、「仏教のほうでいうと、釈迦が七の彌勒、阿弥陀が六の彌勒、観音さんは五の彌勒。日へひの彌勒、水の彌勒、土の彌勒となっていて、それで五、六、七になるのです。そういうわけで、箱根はいつも言う通り「五」になって、熱海が「六」になって、今度の京都は「七」にな

るわけです。ですからそういった、地理的に日本の中にミロクの姿ができたのです。とにかく位置だけは現界的にミロクになったのです。」と平安郷の意義を説かれています。

三代教主様は自らのご神業を土の時代の使命と受け止め、「平安郷は土の聖地です、土というのは全ての生命の源です。土は落ち葉、動物の死骸、雨水や汚水など受け入れて浄化し、必要な養分を添加して次の生命を養ってくれます」、「土とは万物を育み、そしてものを根付かせ、花を咲かせ、実を結び、その実をあちこちに散らせます」、「三代の結びの経綸、土の神業がいよいよ始まります」、「土の経綸にお使いいただくということは、相反するもの、異質なものと結び合う努力をすることですね」とご教導くださいました。

現在、世界に目を向けると、コロナ感染症の終息は見えてきましたが、それに換わる感染症や、精神的な病による事件や問題が後を絶ちません。行き詰まる資本主義経済の煽りを受け、貧富の格差は益々大きくなり、貧困に苦しむ地域や個人の問題は解決できません。二年前に始まったウクライナとロシアの戦争は未だ終結の糸口が見つからず長引く中、昨年はイスラエルでは紛争が勃発し、冷戦以後静まっていた争いが、近年息を吹き返してきたように思えてなりません。

私たちは明主様の弟子として、この現実に向き合い、病貧争の無い理想世界実現のため、そして「地球上のすべての人が幸せになるために何をしたら良いのか」と、大きな課題を投げかけられているように感じます。どのような信仰を持ち、

どのような生き方、行動をすることが大切なのでしょう。例えば、世界で起きている紛争に対して、現地におもむき解決させるのは難しいことです。戦鬪国のリーダーに浄霊しに行くこともできません。けれども明主様のみ教えを信じ、土の働きを信じて、私たち一人ひとりが「地上天国の模型」となるべく、天国人としての心の建設、魂向上を願い、異質なものと相反する価値観を受け入れ、日々の生活の中で、「和する生き方」、「世界の和の模型（ひな型）」として心の建設をさせていくことは可能だと思います。「令」という漢字には「神が告げる」、「君主が命じる」という意味もあり、「和」は「なごむ」と読むと、「かどがたたず、まるくおさまる」という意味になります。令和の建設は形あるものだけではなく、明主様に倣い、一人ひとりが「和」する天国人を目指すことが大切なのではないでしょうか。

現在平安郷は、世界救世教から離脱した明主様信仰をなされている教団の皆さまと「大和心の会」を設立し交流を持ち、皆さま方の参拝や奉仕、一泊奉仕等を積極的に受け入れています。もちろん、包括団体内の東方之光、いづのめ教団、聖地直結の会の信徒も共に『和』の精神のご奉仕が許されています。このような新たな営みも、明主様が私たちに「型」として示されたご教導だと受け止めさせていただいております。令和の平安郷建設の意義を、明主様から一緒に学び、令和五六七の年、そして三〇周年の節目を迎えさせていただけることを願います。

ライオンとネズミ

人を助ければ、その思いやりは必ず返ってくる

眠っているライオンの上に、ネズミがうっかりして、駆けのぼってしまいました。

目を覚ましたライオンは、ネズミを捕らえて食べようと思いました。

すると、ネズミはライオンに、こう命乞いをしました。「こんなちっぽけな私を食べても、たいしてお腹の足しにはなりません。もし、逃がしていただけたら、できる限りのご恩返しをしますので、どうか助けてください」

ライオンはネズミに助けてもらうことなど一生ないだろうと思いつつも、逃がしてあげることになりました。

その日からおよそ一年が過ぎたある日、ライオンは人間のつくったアミのワナに引っかかってしまいました。ライオンはアミのなかで宙づりになり、身動きがとれないので、泣き叫びました。

すると、その声を聞きつけたネズミが飛んできて、



「以前のご恩は決して忘れていません。助けて差し上げましょう」

といって、小さな歯でアミをかじりはじめました。ネズミが一生懸命かじりつづけたので、アミのワナは破れ、ライオンは逃げる事ができたのです。

「幸せの種まきの会」のみなさん、新年おめでとう。

今年も「イソップ物語」をみんなで学び合い、楽しい会話をしましょう。

今号は、ライオンがネズミを助け、ネズミがライオンに恩返しをしています。ポイントは「他人を助けてあげれば、他人が幸せになるばかりでなく、自分も幸せになる」という連鎖のしぐみです。

「自分がしたことは、良いことも悪いこともすべて自分に返ってきます」「例えば人の悪口を言うと、自分もどこかで悪口を言われ、逆に人を親切にすると、自分も別のところで親切にしてもらえます。自分の〈想い〉〈言葉〉〈行動〉は良いことでも悪いことでも同じものが自分に返ってくる」と教えています。

正月ですので、今年は親孝行をしましょう。親が一番喜ぶことは、子供の笑顔です。笑顔は「人を動かします」どうか、子供として「よく笑わせる一年にしましょう。」「笑いのある所に、お年玉も動く」ことと信じています。



飛翔

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 68 2024年1月15日発行

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

